

アジアにおけるコホート連携（Birth Cohort Consortium of Asia, BiCCA）の活動と今後の国際協力に向けて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 日本DOHaD学会事務局 公開日: 2019-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/00003596">http://hdl.handle.net/10271/00003596</a>

## シンポジウム 1 「コホート連携」

### アジアにおけるコホート連携 (Birth Cohort Consortium of Asia, BiCCA) の活動と今後の国際協力に向けて

岸 玲子 (北海道大学 環境健康科学研究教育センター)

Current and Future Perspectives of the Birth Cohort Consortium of Asia (BiCCA)

Reiko KISHI

(Hokkaido University, Center for Environmental and Health Sciences)

胎児期から発達期のコホート研究は、様々な環境リスクを明らかにするうえで理想的な方法である。BiCCA は 2011 年に、アジアの 3 つの出生コホート、台湾の TBPS、韓国の MOCEH、日本の「環境と子どもの研究に関する北海道スタディ」の PI が相談して設立した。現在 16 か国、31 コホートが参加している。研究代表者会議においてコンソーシアムの目的、取り込み基準、By Law が確定され、共同研究が進んでいる。アジアも発展途上国、先進国と多彩で、BiCCA は大きくは環境が焦点の研究と DOHaD (主体は栄養) 研究、および両者を行う 3 種類に分かれる。(Kishi et al., Birth Cohort Consortium of Asia, Current and Future Perspectives, Epidemiology 2017, 28: Suppl 1, S19-S34) では各コホートの研究枠組み、環境暴露と健康アウトカム評価、母児の特徴を示した。現在、日本からは、北海道スタディ、東北 (TSCD)、浜松 (HBC)、千葉、金沢 (ヴェトナム)、成育 (モンゴル) が参画している。サイズは様々であるが、合計するとほぼ 10 万人に達する。自身の連携経験を紹介すると、我々は、2001 年から厚生労働科学研究で「環境と子どもの健康に関する北海道スタディ: 先天異常・発達・アレルギー」を立ち上げた。器官形成期に同意を得、母 20,929 人のベースライン採血を行い、出生アウトカムを観察し、その児を学童期、思春期と追跡している。他の一つは妊娠中後期に母 514 人の同意を得て児の詳細な精神神経発達を観察している。母の環境化学物質曝露が生下時体格、甲状腺機能、性ホルモン、IgE などに影響を与え、神経発達、感染症アレルギー等にも影響を与えることがわかった。現在、欧米の種々の consortium (PACE や Thyroid) とも連携する形で国際共同が進んでいる。特にエピゲノム解析で台湾との協力が進んだ。今後もさらなる連携が望まれる。